

機関番号：33908

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520555

研究課題名（和文） 国際英語論が日本人の英語学習に与える教育効果について

研究課題名（英文） Pedagogical effects of World Englishes on Japanese English learners

研究代表者

吉川 寛 (YOSHIKAWA HIROSHI)

中京大学・国際英語学部・教授

研究者番号：90301639

研究成果の概要（和文）：

本研究では、大学における国際英語論に基づく英語指導のための評価項目を設定し、それを踏まえた教育活動の実践をめざす一方、アウトサークル地域への短期留学前後の大学生を対象に日本人に適した「内的基準に基づく英語到達目標」を提示し、併せて国際コミュニケーションにおける affective competence の重要性などの指導をおこなった。学生へのアンケート調査から、留学後「日本人英語への肯定的認識の向上」や「日本人英語教師による授業への志向性」等の高まりが見られることが判明した他、国際英語論の学習により「第二言語不安」が軽減し、英語を用いた国際発信力の強化という点で有意な教育効果をもちうるということが判明した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of the present study was to investigate the pedagogical effects of the ideas of World Englishes (WE) on Japanese English learners. We defined and made a list of necessary factors and consideration in practicing ideas of WE in classrooms, proposed endo-normative goals of English for Japanese learners and stressed the importance of 'affective competence' in international communication through Englishes. Teaching ideas of WE that deny Anglo-centric views of English had considerable effects on Japanese learners by raising their positive attitudes toward Japanese English as well as Japanese English teachers, while decreasing anxiety in speaking English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会言語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：国際英語論、日本人英語、英語教育、教育効果、通用度

1. 研究開始当初の背景

「国際英語論」は、現在の英語が英米を中心とする母語話者英語圏の地域言語としての役割を超えて、多くの ESL 地域での国内共通語として、また、EFL 地域を含めた国際的な共通語として、飛躍的にその重要度を増している現状をどう受け止めるべきか、また、将来的な国際英語のあり方をどう方向づけるか、という関心のもとに 1980 年代から活発化してきた社会言語学的研究分野である。非英語母語話者の数が英語母語話者を遥かに凌ぐ状況の中で、母語話者英語偏重主義の見直しを提案した。

David Crystal, Braj Kachru, Larry Smith などによる先行研究は、数々の ESL・EFL 変種に関する実態研究や、英語と identity の関係を扱う研究、Jennifer Jenkins の lingua franca core に見られる国際共通語としての英語モデルの構築をめざす研究 (Jenkins 2003)、また、英語変種間の international intelligibility に関する研究 (Smith 1992) などへと発展した。最近では、母語話者か否か (nativity)、社会制度化 (institutionalized) された位置づけを持つか否かを分類基準にするのではなく、international intelligibility と locality を基準とする、より機能的で柔軟な英語区分の提案などもなされていた。また、日本人研究者の間では、国際英語論の視点から「日本人英語」を多面的に研究する必要性が強調されてきていた。

2. 研究の目的

世界の英語使用地域が拡大し、英語の国際共通語化が顕著となる中で、従来の母語話者英語偏重の姿勢を見直し、非母語話者英語の重要性を同等に評価しようとする「国際英語論」への注目が高まっている。「英語は英米の言語である」とする旧来の英語観と実際の英語事情との大きな落差を指摘し、「英語は誰のものか」という問いをあらためて投げかけた点で、国際英語論の現代的意義は極めて大きいといえる。

本研究の目的は、そのような国際英語論の視点を、英米偏重主義のいまだ根強い日本の英語教育に導入する意義を考察し、具体的な方法を検討するとともに、国際英語論の導入が日本人の英語学習や英語使用にどのよう

な教育効果を与えうるかについての、調査と分析を行うことにある。

3. 研究の方法

本研究では、前提的研究と主要研究を平行的に実施した。

・前提的研究

1. 国際英語論に関する理論研究
2. 日本人の英語と英語使用に関する研究 (アジアの英語との比較を含む)

これらのテーマは本研究グループがこれまでに積み重ねてきた研究テーマであり、今回の主要研究に理論的枠組みを与えるものとして継続された。

・主要研究

主要研究項目は、

1. 国際英語論を日本の英語教育に導入する際に重要となる基本理念の確認
2. 国際英語論を英語教育に応用する方法についての検討
3. 国際英語論の視点が日本人の英語学習や英語使用に与える教育効果についての調査と分析

であり、これらを遂行する上で、具体的に以下の研究をおこなった。

- (1) 国際英語論に基づく英語教育の展開法に関するアセスメント基準の一覧化
- (2) 日本人にとっての英語学習モデル・日本人がめざすべき英語学習の到達目標・日本人英語の特性に関する研究
- (3) 国際コミュニケーションにおいて日本人に求められる心的態度の研究
- (4) 国際通用度をもつ英語表現のあり方、特に英語慣用表現に関する研究
- (5) 国際英語論が日本人の英語学習にもたらす教育効果の測定と分析。特にシンガポールへの短期留学生を対象に実施した事前事後教育が「第二言語不安」の軽減や国際発信力の強化に与えた教育効果に関する調査

国際英語論を大学の英語教育に導入する上でのアセスメント基準の設定などをおこない、日本人が目指すべき英語技能レベルや日本人の英語学習に求められる心的態度の分析を行うとともに、アウトサークル地域への短期留学生を対象とした国際英語論の導入が学習者心理と英語技能の両面におい

て与える教育効果の調査分析をおこなった。

4. 研究成果

研究成果としては、以下の点を挙げる事ができる。

- (1) 高等教育に国際英語論を導入する上で重要となる教育要素を取り上げ、国際英語論に基づく英語教育の展開法に関するアセスメント基準の一覧化(表1)を行ったことにより、国際英語論を導入するための実践的指標の提示が可能となった。

(表1) 国際英語論に基づく教育評価視点

チェック項目		
1	カリキュラム・シラバスに国際英語論の理念が反映されているか	
2	教員が国際英語論の理念を理解しているか	
3	教員の多様性は確保されているか	ENL
		ESL
		EFL
4	endonormative (内的規範) になっているか	
5	適切は関連科目が設定されているか	啓蒙型
		体験型
6	適切な英語モデルが提供されているか	
7	英語技能の指導に国際英語論の理念が反映されているか	Reading
		Writing
		Speaking
		Listening
8	異文化・多文化理解指導が含まれているか	

- (2) 日本人の英語発達を四段階で提示し、日本人のための英語学習の到達目標として英米語の模倣とは異なる「内的規範」に基づく目標を提示しえたこと。

(表2) 英語習得の4段階と innovation

		International Intelligibility	標準英語との相違点	訂正の必要性
学習段階	①	支障の多い段階	error	必要
	②	支障の少ない段階	error	必要
習熟段階	③	支障のない段階	Innovation	不要
	④	理想的な段階	innovation	不要

表2では、日本人英語の英語学習段階①②における学習モデルとの相違点は error であり、学習モデルに合わせた訂正が必要であるが、習熟段階③における学習モデルとの相違は日本人英語の innovation (個性) であり、訂正の必要はないという考えを明示した。

(3) 国際コミュニケーションにおいて日本人に求められる心的態度として affective competence の重要性を指摘し、国際発信力の育成においてそれらの特性がもつ意義を分析提示したこと。 affective competence とは国際コミュニケーション活動において恥ずかしさや緊張感を乗り越えて自分の感情をコントロールし、積極的にコミュニケーションをとろうとする態度・能力・行動力(8つの下位区分を含む)を指し、表2の④では、そのような心的態度を伴った英語使用を日本人の英語習得の到達目標として提示した。

- (4) 国際通用度をもつ英語表現のあり方、特に英語慣用表現に関する研究を行い、慣用表現の中にも文化の壁を越えて通用性をもつものがあることを示し、日本人の創造的英語使用が相当程度許容されうることの根拠を示したこと

比喩や慣用表現は言語の背景にある個々の文化特性に束縛されるため国際コミュニケーションの支障になるという指摘がなされることも多いが、文化の壁を越えて国際的に通用しうる比喩や「母語慣用表現の英語への転用」が存在することを示し、それらが国際通用度をもちうる意味的範囲を分析し、外国語としての英語使用における創造的な言語使用の可能性を示した。

- (5) 国際英語論が日本人の英語学習にもたらす教育効果の測定と分析。特にシンガポールへの短期留学生を対象に実施した事前事後教育が「第二言語不安」の軽減や国際発信力の強化に教育効果を持ちうることを示したこと

国際英語論を用いた指導として、国際英語論の評価視点(表2)を踏まえた教育活動を展開するとともに、アウターサークル地域(シンガポール)に短期留学を行う大学生を対象に日本人の英語習得の4段階を提示して日本人に適した内的基準に基づく到達目標の重要性を指摘し、国際コミュニケーションにおける affective competence の重要性なども取り上げた。アウターサークル地域への

留学に参加した学生へのアンケート調査から、留学後「日本人英語への肯定的認識の向上」や「日本人英語教師による授業への志向性の高まり」等が見られることが判明した他、国際英語論の学習により「第二言語不安」や日本人英語への否定的評価が軽減し、英語を用いた国際発信力の強化という点で有意な教育効果をもたらすことが判明した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連帯研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 吉川 寛、小宮富子他、「多文化共生時代における英語教育と言語アセスメント」、『大学英語教育学会中部支部紀要』、第8巻、査読有、2010、pp. 31-50
 - ② 小宮富子、「Tomorrow is busy. という日本人英語は絶対に間違いか?」、『英語教育』、査読無、9月号、2010、pp. 34-35
 - ③ 塩澤 正、「「国際英語論」の視点から英語を学ぶ意義」、『人文学部研究論集』、第22号、査読有、2009、pp. 63-91
 - ④ 吉川 寛、「日本の英語教育への国際英語論の有効性」、*Annual Review of English Learning and Teaching*、査読無、No14、2009、pp. 83-90
 - ⑤ 小宮富子、「小学校における英語活動導入の問題点と指導法について」、『岡崎女子短期大学研究紀要』、査読無、42巻、2008、pp. 17-23
 - ⑥ 吉川 寛、小宮富子他、「グローバル化時代における言語アセスメントの意義」、『大学英語教育学会中部支部紀要』、第6巻、査読有、2008、pp. 31-56
 - ⑦ 吉川 寛、倉橋洋子、小宮富子、塩澤 正、下内 充、「国際英語の観点からみた日本人英語」、『JACET中部支部記念論文集』、査読有、2008、pp. 31-56
 - ⑧ 吉川 寛、
“International intelligibility in World Englishes: focusing on idiomatic expressions”、*Intercultural Communication Studies*、査読有、XVII:4、2008、pp. 219-226
- [学会発表] (計14件)
- ① 小宮富子、“English as a Distant Lan-
 - guage”、第36回 JALT 全国大会、2010年11月21日、名古屋
 - ② 倉橋洋子、“The Understanding of Loan Words from English in Advertisements by Japanese University Students: How to teach English Words from Loan Words”、第16回国際英語学会世界大会、2010年7月27日、バンクーバー・カナダ
 - ③ 小宮富子、「多文化共生時代の英語教育」、大学英語教育学会中部支部大会、2010年6月5日、中京大学
 - ④ 下内 充、“Loanwords in Japanese and a Style of Japanese English”、第15回国際英語学会世界大会、2009年10月23日、セブ・フィリピン
 - ⑤ 倉橋洋子、“Cultural characteristics-expressed through “It cannot be helped” in Japanese American Literature”、第15回国際英語学会世界大会、2009年10月23日、セブ・フィリピン
 - ⑥ 吉川 寛、「「国際英語論」は日本の英語教育への有効か?」、第23回 JACET 九州・沖縄支部研究大会、2009年7月20日、沖縄
 - ⑦ 小宮富子、「日本人に最適化した英語教授法のアセスメント」、大学英語教育学会中部支部大会、2009年6月6日、名古屋外国語大学
 - ⑧ 吉川 寛、“International intelligibility on World Englishes: focusing on idiomatic expressions”、第14回国際英語学会世界大会、2008年12月5日、香港
 - ⑨ 倉橋洋子、“New English literatures as English materials”、第14回国際英語学会世界大会、2008年12月4日、香港
 - ⑩ 下内 充、“English Phrasal Verbs and a Style of English Spoken by the Japanese”、第14回国際英語学会世界大会、2008年12月3日、香港
 - ⑪ 塩澤 正、“Do the study abroad experiences improve the tolerance towards the varieties of English?”、第14回国際英語学会世界大会、2008年12月3日、香港
 - ⑫ 小宮富子、“Determiners in Japanese English”、第14回国際英語学会世界大会、2008年12月3日、香港

- ⑬ 吉川 寛、「韓国における英語受容」、日本英語学会、2008年11月16日、筑波大学
- ⑭ 吉川 寛、小宮富子、「言語アセスメントの有効性と英語教育」、大学英語教育学会第47回全国大会、2008年9月12日、早稲田大学

[図書] (計6件)

- ① 小宮富子 (共著)、開拓社、『言葉とコミュニケーションのフォーラム』、2011年、280頁 (135-144)
- ② 吉川 寛 (共著)、大修館書店、『英語教育大系第3巻：英語教育と文化』、2010年、284頁 (123-128、138-143、163-168)
- ③ 塩澤 正 (共著)、大修館書店、『英語教育大系第3巻：英語教育と文化』、2010年、284頁 (3-15、25-42、239-241)
- ④ 小宮富子 (共著)、大修館書店、『英語教育大系第3巻：英語教育と文化』、2010年、284頁 (158-163、169-179)
- ⑤ 下内 充 (共著)、大修館書店、『英語教育大系第3巻：英語教育と文化』、2010年、284頁 (179-182)
- ⑥ 倉橋洋子 (共著)、大修館書店、『英語教育大系第8巻：英語研究と英語教育—ことばの研究を教育に活かす』、2010年、296頁 (211-228)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉川 寛 (YOSHIKAWA HIROSHI)
中京大学・国際英語学部・教授
研究者番号：90301639

(2) 研究分担者

塩澤 正 (SHIOZAWA TADASHI)

中部大学・人文学部・教授

研究者番号：10226095

倉橋 洋子 (KURAHASHI YOKO)

東海学園大学・経営学部・教授

研究者番号：10082372

小宮 富子 (KOMIYA TOMIKO)

岡崎女子短期大学・幼児教育学科・教授

研究者番号：40205513

下内 充 (SHIMOUCHI MITSURU)

東海学院大学・人間関係学部・准教授

研究者番号：50249215